

【原著論文】

体育系大学生の大学生活不安に関する研究

清宮 孝文¹⁾, 依田 充代¹⁾, 門屋 貴久²⁾

¹⁾ スポーツ社会学研究室

²⁾ 教職教育研究室

A study of university life anxiety among physical education students

Takafumi KIYOMIYA, Mitsuyo YODA and Takahisa KADOYA

Abstract: The aim of this study is to identify factors that increase student's anxieties about university life at a physical education university and contribute to the support of these students.

We conducted a questionnaire survey among 549 students of a physical education university using Fujii's (1998) university life anxiety scale. A factor analysis of the survey results revealed five factors that increased anxiety: maladjustment to university life, lifestyle at the university, repeating a school year, study habits, and interpersonal relationships. We then used these five factors and the university life anxiety scale results to compare the impact of gender, admission type, and participation in club activities. Our analysis revealed that the degree of anxiety and its contributing factors vary depending on these three attributes.

With regard to students who participated in club activities, we observed a particularly notable difference between those who had been admitted to the university based on a sports-related recommendation and those who had been admitted through other means, with the latter group displaying a higher degree of anxiety.

(Received: May 11, 2015 Accepted: September 14, 2015)

Key words: physical education students, university life, university life anxiety

キーワード：体育系大学生，大学生活，大学生活不安

1. はじめに

学生支援は、1949年5月に日本が直接設置した国立学校設置法施行規則において「厚生補導に関する部を置く」と規定した¹⁾ことに始まる。この厚生補導は学生支援の前段階であり、新しい大学教育の理念を実現するため、アメリカの実例に多くを学び、家庭外の教育活動と学生生活全般にわたる適応と修学効果の改善を目的として導入された²⁾。しかし、厚生補導は学生運動対策的な性格の強いものであった¹⁾とされ、現代のように学生を支援するという目的で設置されていなかった。その厚生補導について、大山(2003)は「厚生補導は、大学生活が円滑におこなわれるための条件整備というニュアンスが強かった。成果教育が大学教育の中心に位置づけられ、厚生補導は副次的な位置に

置かれることが多かった³⁾と示している。一方で学習支援について、大山(2003)は「正課教育と課外教育とを有機的に関連させて大学での『学び』を考えざるを得ない状況になっており、教育機能そのものとしての学生支援が着目されはじめて³⁾」と述べている。さらに、文部科学省から2000年に「大学における学生生活の充実方策について」の報告がだされ、谷田川(2012)が「学生が社会に貢献する人材となり得る高い付加価値を身につけて卒業できるように、『大学中心』から『学生中心』の考え方への転換の提言がなされた。これ以降、正課としての大学教育を潤滑に遂行するための補助的活動というこれまでの厚生補導の理念を脱却し、より大学が積極的に学生にかかわる『学生支援』へと移行する⁴⁾」と提言している。このことから、現代の大学におけるサポートは、正課教育だけでなく、就

職やクラブ・サークル活動、心理相談などの課外教育にも目が向けられ、「大学中心」から「学生中心」の大学に移行していると言える。「学生中心」の大学作りの一つとして、学生相談が存在する。学生相談とは、日本学生支援機構が「学生が『ニーズを感じた時点』で、『個別相談』を中心とする丁寧なコミュニケーションを通じて、『全人的に』育てていく機能を有するもの」⁵⁾と示し、現代の学生サポートの中で最も設置されているものである。

しかし、現在学生の多様化に伴い、学生支援は大学全体の問題となっている。その対策として文部科学省は2007年度から2008年度にかけて「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)」⁶⁾という、学生の人間力を高め人間性豊かな社会人を育成し、広く社会に情報提供や財政支援を行い、各大学等における学生支援機能の充実を図るための学生支援を行った。

また、学生の多様化の原因については、大学への進学率の増加が挙げられ、谷田川(2012)が「大学・短大進学率は1990年の36.3%から2000年には49.1%となり、トロウの大学発展段階というユニバーサル・アクセス段階へ突入しようかというところまで上昇した。しかし、18歳人口は減少し続ける見通しであったため、各大学とも学生の確保に必死にならざるを得ず、多様な入試方法で入学者への門戸を開いた。その結果、学力的にもこれまで大学に進学しなかった層が大学に入学するようになり、大学生の質の変化や学力低下、中途退学などが浮上した」⁷⁾と指摘している。さらに、現在の大学生の発育・発達という視点でみると福田(2007)は「一昔前なら18～22歳は立派な成人だったが、今はそうはいえない、発達上、青年期という思春期と成人期の中間で微妙な時期になる。以前は、より年少に出るとされた問題(不登校や家庭内暴力、発達障害、抜毛症、チックなど)が大学生でも当たり前に見られる」⁸⁾と発育の遅れからくる現代の大学生における問題点を述べている。

このような大学生の現状では、退学者は後を絶たず、実際に読売新聞取材班の「大学の實力 教育力向上への取り組み」⁹⁾によると、4年間のうちに退学した学生の割合は8.2%であったが、中には退学率が40%を超える大学も存在することが明らかとなっている。

また、川崎ら(2014)が「本人が退学の意味を大学に伝える時点で大学側が説得をはじめても本人の意思はすでに固まっていることが多かった」¹⁰⁾と述べていることから、潜在的に悩みを抱えている学生に対するサポートが必要となっている。

さらに、中島(2012)が「大学適応に学校側の支援を必要とする学生は増加しているものの、現代の学生

に共通するような支援だけでなく、大学や個人によって異なる背景に即した形での支援も同時に行っていく必要に迫られている」¹¹⁾と指摘しているように、大学別や学生一人一人にどのようなサポートが必要であるのかを考えていかなければならない。

現在、先進的な学生支援を展開している大学では様々なサポートを実行している。例えば、「ピア・サポート」、「オフィス・アワー」、「なんでも相談」、「学生総合支援センター」などの支援が挙げられる。中でも「ピア・サポート」は学生が学生の悩みを聞くサポートであり、同じ境遇にいる学生同士で意見交換ができる上に、下級生など大学についての知識が乏しい学生にも有効なサポートといえる。また、「オフィス・アワー」は教員が学生に対応する時間を事前に提示し、授業単位について不安に思う学生や授業で分からないところがある学生など、様々な学生に対応できるサポートである。

さらに、学生をサポートするためには学生の現状を十分理解することが必要である。藤井(1998)が「現在行われ始めている『大学革命』には当の大学生の声十分に反映されているとはいえないので、まず大学生が大学のみならず日常生活においてどのような不安を多く感じているのかを大学教官自らが知り、それをもとに改善していく姿勢こそが今まさに問われてきている」¹²⁾と述べている。このように、大学生が感じている不安の実態を知ることが大学生の不安を取り除く上で非常に重要である。さらに、藤井(1998)は「あまり大学生活において不安が強くなりすぎると対人恐怖症や不登校といった『大学不適応』に陥り、その結果として留年や退学にまで発展してしまう」¹²⁾と示している。

このような大学生活での不安感を早期に発見するために、藤井(1998)は大学生活不安尺度を作成した¹³⁾。その尺度を用いて不安要因を明らかにしている研究は、数多くあり様々な視点から大学生活における不安感を分析している。大学生活における不安要因について1990年代に行われた藤井(1998)の研究では「女子学生の方が男子学生よりも不安を強く感じており、学年が上がり大学生活に馴染めば馴染むほど一般に下がる」¹⁴⁾ことが明らかになった。一方で、徳田(2005)と野中ら(2013)の研究では、大学生活における不安に性差は見られなかった^{15,16)}。また、学年差については、徳田(2005)が学年で不安は異なる¹⁶⁾と述べていることから15年前に行われた研究と同様に学年によって不安は変動することが示唆された。

さらに、福井(2007)は「大学生活不安には、全体的にストレスの影響が強い」¹⁷⁾と述べ、「対人ストレスの中でも対人劣等との関係が強く、対人葛藤事態が多いものは大学生活特有の不安を多く抱え、大学不適

応状態になりやすい¹⁷⁾とストレスが大学生活不安には強く影響し、対人葛藤も多く抱えている者は結果的に大学不適応状態になり得ることを明らかにしている。

サポートと大学生活不安の関わりについて、福井(2007)は「大学生活における不安には家族よりも教員のサポートが重要である¹⁷⁾とし、「ソーシャル・サポートは期待されたほどの緩和効果はなく、唯一教員からのサポートが高い者は評価不安や大学不適応の得点が抑えられていることが明らかとなった¹⁷⁾と示していることから、大学において授業単位や授業内容に悩む大学生に対しては、教員からの直接的なサポートが大学生活不安を抑える効果があるといえる。

大学生活での居場所感と大学生活不安の関わりについて、糸原ら(2011)は「大学において居場所感を有していない学生は、大学に居場所感を有している学生よりも、大学生活における不安を高く感じている¹⁸⁾と述べ、大学での「居場所」の欠如が大学生活不安に繋がることを明らかにしている。「居場所」については、1992年に文部省が不登校に関する報告書¹⁹⁾の中で学校が「心の居場所」の役割を果たすことの必要性を提唱した。その報告書が出されたことを踏まえ、石本(2009)が調査した結果では「朝日新聞紙面での『居場所』や『居場所がない』といった表現の使用頻度の推移をみると1994年までと1995年以降との間で大きな上昇が見られる²⁰⁾ことから、1995年以降、学校での「居場所」が目目され始めたといえる。「居場所」とは、萩原(1997)が「『私』とひと・もの・こととの相互規範的な意味と価値と方向の生成によってもたらされる『私』という位置である²¹⁾と示している。また、西中(2014)が「居場所とは、対人関係を中心に据えた概念といえる²²⁾と述べているように、人や大学との関係性を前提とし生成されるものである。さらに、中西(2005)が「居場所」は人の生死にさえ影響を与える²³⁾と述べ、社会学の視点から見た「居場所」について阿部(2011)は「人が生きていくための『いのちづな』²⁴⁾と示していることから、「居場所」の欠如は生死にも関わるため、「居場所」を有していない学生に対して大学はサポートを行っていく必要があると考える。

以上のように、これまで大学生活不安について数多くの研究が行われてきた。現代の学生は様々な不安を潜在的に抱え、大学生活を送っている。体育系大学生の大学生活における不安は、大石ら(2007)の研究によって、3・4年生よりも1・2年生の方が不安は強いこと、部活動所属群の方が不安は強いことが明らかにされている²⁵⁾。しかし、性別と入学形式の属性別で体育系大学に通う学生の不安感の特徴を明らかにし、不安が強い群に対してサポートを検討している研究はまだ見られない。

そこで本研究は、これまでの大学生活不安研究において最も信頼されている、藤井(1998)が作成した大学生活不安尺度¹³⁾を用いて、体育系大学に通う学生の不安感の特徴、属性ごとの不安要因を明らかにし、これからの体育系大学生へのサポートの一助にすることを目的とする。

II. 研究方法

本研究は、集合調査法を用いて質問紙調査を行い、分析にはIBM SPSS Statistics 22を用いた。

1. 調査対象者

調査対象者は、体育系大学に通う大学生の大学生活への不安感を明らかにするため、体育系A大学の学生(以下、体育系大学生)とした。また、学年は第2学年に選定した。回収数は549名(男子338名、女子206名、無記名5名)、有効回答数は549(96.1%)であった。

第2学年に選定した理由は、鶴田(1998)が中間期(2～3年生)では、「学生が大学入学直後の表面的な適応を一時的に壊して真の適応へと至る期間であり、学生が曖昧さの中で内面を見つめる体験をする時期である²⁶⁾と述べていることから、第2・3学年の学生は、大学生活に向き合っていることが窺え、今回の研究目的に適する学年であると考えた。また、体育系大学では特に1・2学年は上下関係などの影響により、不安が強まることが予想されるが、第1学年の学生はまだ大学に適応できておらず、大学生活への不安を正確に捉えることができないため、今回の調査対象から除外した。

つまり、体育系大学特有の上下関係の影響などを考えると第2学年の学生は多くの不安を抱え、大学生活に向き合っていると推測したことから、今回の学年に選定した。

2. 調査の時期及び内容

本調査は、日本体育大学ヒトを対象とした実験等に関する規程に基づき、説明書、同意書、審査申請・研究計画書を提出し、倫理審査委員会の承認(承認番号:第014-H43号)を受け、2014年9月22, 24, 25, 26日の4日間で行った。

内容は、以下の通りである。

(1) 対象者の属性に関する設問

対象者の属性に関する設問については、性別(2選択肢)、入学形式(6選択肢)、学友会所属(3選択肢)の計3設問を設定した。

(2) 大学生活の不安に関する設問

大学生活の不安に関する設問については、藤井(1998)の「大学生活不安尺度¹³⁾(2件法・計30設問)を用いた。

(3) カウンセラー窓口の認知に関する設問

カウンセラー窓口の認知に関する設問については、2件法で1設問を設定した。

3. 分析方法

(1) 単純集計

調査により得られた結果について、「調査対象者の属性」、「大学生生活不安尺度」¹³⁾について単純集計を行った。

(2) 因子分析

体育系大学生の大学生活に対する不安要因を明らかにするため、藤井(1998)が作成した大学生生活不安尺度¹³⁾ 30項目に対し、主因子法、プロマックス回転で因子分析を行った。

(3) *t*検定

体育系大学生の大学生活不安上位群と下位群で各因

子と項目に差があるのかを明らかにするため、*t*検定を行った。

また、属性別に大学生活不安要因を明らかにするため、大学生活不安尺度全体と各5因子に対して、属性の比較を行った。属性の分析は、①男性・女性、②スポーツ推薦・スポーツ推薦以外、③運動部所属群・学友会無所属群、④運動部所属群のスポーツ推薦・スポーツ推薦以外とした。

(4) 大学生生活不安尺度¹³⁾

大学生活不安尺度は、藤井(1998)が大学生活全般における不安の測定を目的として作成したものである。この尺度は3つの下位尺度に分かれ、①大学の日常生活に対する不安感(日常生活不安)②大学における単位や試験に対する不安感(評価不安)③不登校や中退といった就学上の問題を生じさせる大学不適応感(大学不適応)となっている。尺度の測定方法は、30点満

表1 大学生生活不安尺度

大学生生活不安尺度(項目)	大学生生活不安尺度(省略)
1. 大学で人が自分のことをどう思っているのか、気になります。	公的自己意識
2. 4年間で卒業できるかどうか、不安です。	卒業
3. 留年したらどうしようと、気になります。	留年
4. 万一事故に遭ったり、病気をしたらどうしようと心配になることがあります。	事故・病気
5. 友達と一緒に何かしなければならぬとき、うまく協力できるか不安な気持ちになります。	友達
6. 部活やサークルで先輩たちとうまくつき合えるか心配です。	先輩
7. 1時間目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安です。	1限の授業への出席
8. 何らかの団体に突然勧誘されないか、不安です。	団体への勧誘
9. 先生が近くにいると気になって仕方ありません。	先生との距離
10. 1ヶ月の生活費が足りるかどうか、心配です。	1ヶ月の生活費
11. 授業中、先生の言っている内容がわからなくて、不安になることがあります。	授業理解
12. 大学の先生と話をするときは、とても緊張します。	先生との会話
13. 先生に「研究室まで来るように」と呼ばれたら何を言われるかとても気になります。	先生からの呼出
14. 将来、良い会社に就職できるかどうか、不安です。	就職
15. 授業中に何かをしなければならぬとき、へまをするのではないかと不安になることがあります。	授業中のへま
16. 必須科目の成績がD(不可)だったらどうしようと心配になることがあります。	必須科目の単位
17. テスト中に時間が残り少なくなると、自分の考えがまとまらなくなります。	テスト(時間不足)
18. テストを受けていて、わからない問題に出会ったとき、頭の中が真っ白になってしまうことがあります。	テスト(解答不可)
19. 成績のことが気になって仕方ありません。	成績
20. 大学の成績のことを考えると、憂鬱です。	成績による憂鬱
21. 申請した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配です。	授業単位
22. テスト中、緊張して自分の力が発揮できません。	テスト(緊張)
23. 授業で発表するとき、声が震えることがあります。	授業(緊張)
24. 卒業論文がうまく書けるかどうか、不安です。	卒業論文
25. テストを受けるとき、悪い点をとってしまうのではないかと心配になります。	テスト(結果)
26. こんな大学にいたら自分がダメになるのではないかと憂鬱な気分になることがあります。	大学への不自信
27. この大学にいて、何か不安な気持ちになります。	大学への不安
28. できることなら、転学あるいは転部したくて仕方ありません。	転学・転部
29. 入学した学部が自分にあっていないような気がして不安です。	学部不適応
30. 大学を退学したいと思うことがあります。	退学

点で点数を算出し、点数が高い者ほど不安が強いことになる。表1に大学生生活不安尺度の項目と以下で使用
する大学生生活不安尺度の省略名称を示す。

III. 結果及び考察

1. 調査対象者

(1) 性別

調査対象者の性別は、「男性」61.6%、「女性」37.5%の割合であった。

(2) 入学形式

調査対象者の入学形式は、「スポーツ推薦」38.6%、「指定校推薦」9.8%、「AO」17.6%、「一般」33.7%の割合であった。

(3) 学友会

調査対象者の学友会所属は、「運動部」72.9%、「サークル同好会」11.1%、「無所属」11.1%、「準公認団体」2.0%、「応援部」1.8%、「厚生文化部」1.1%の割合であった。

2. 大学生生活不安尺度

表2は、大学生生活不安尺度30項目を不安の割合が高い項目から順位をつけていった結果である。大学生生活不安尺度の中で特に高くなった項目の割合は、「就職」73.3%、「卒業論文」73.1%、「授業単位」54.6%、「公的自己意識」51.7%、「先生からの呼出」51.2%、「事故・病気」50.6%であった。体育系大学の学生が最も不安と感じていた「就職」について、田中ら(2008)は「『進路(職業)決定不安』についての平均値は1回生で低く、2回生で高くなり、その後学年が上がっていくにつれ平均点が低くなっている」²⁷⁾と述べ、田中(存)ら(2007)が「就職など現実的に進む道が見つかった時、不安を感じなくなる」²⁸⁾と示している。これらの研究は、体育系大学以外の大学ではあるが、2年生が就職に対して不安を感じる時期であることが窺える。また、体育系大学に対して調査を行った大石ら(2007)の研究²⁵⁾でも就職の不安を含む下位尺度の日常生活不安は2年生が最も高かった。今回の調査結果でも大学生生活不安が最も高かったのは「就職」であったため、体育系A大学でも1・2年生からキャリア支援を強化していく必要がある。

表3は、体育系大学生の大学生生活不安を構成する因子について検討するために、因子分析を行った結果である。まず始めに、藤井(1998)の大学生生活不安尺度¹³⁾30項目に対して主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った結果、各因子に対する負荷量の絶対値が.400未満の項目が4, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 15, 19, 20と10項目あったため、それらを削除し、再度因子分析を行った。2回目の因子分析では、25の項目が.400

表2 大学生生活不安尺度(項目別)

順位	項目	不安	不安でない
1	就職	73.3	26.7
2	卒業論文	73.1	26.9
3	授業単位	54.6	45.4
4	公的自己意識	51.7	48.3
5	先生からの呼出	51.2	48.8
6	事故・病気	50.6	49.4
7	必修科目の単位	46.6	53.4
8	テスト(結果)	44.8	55.2
9	1ヶ月の生活費	41.7	58.3
10	成績	39.9	60.1
11	授業理解	37.4	62.6
12	テスト(時間不足)	36.3	63.7
13	テスト(解答不可)	33.9	66.1
14	1限の授業への出席	32.8	67.2
15	留年	31.6	68.4
16	卒業	30.7	69.3
17	成績による憂鬱	30.5	69.5
18	友達	27.4	72.6
19	授業(緊張)	25.8	74.2
20	先輩	25.0	75.0
21	大学への不安	24.1	75.9
22	大学への不信感	24.0	76.0
23	授業中のへま	23.8	76.2
24	先生との会話	17.4	82.6
25	退学	15.8	84.2
26	テスト(緊張)	15.4	84.6
27	転学・転部	14.5	85.5
28	学部不適應	14.5	85.5
29	先生との距離	10.5	89.5
30	団体への勧誘	7.4	92.6

※数値は%表記

未満であったため削除し、1回目同様、再度因子分析を行った。計3回、因子分析を行った結果、5つの因子を抽出した。因子I($\alpha=.79$)は、「大学への不信感」「大学への不安」「退学」「転学・転部」で構成され、大学不適應状況にある学生が当てはまる項目であることから「大学不適應」と名付けた。因子II($\alpha=.72$)は、「就職」「卒業論文」「先生からの呼出」「必修科目の単位」「授業単位」で構成され、就職や先生から研究室に呼ばれるなど、大学生生活特有の不安であることから「大学生生活」と名付けた。因子III($\alpha=.85$)は、「留年」「卒業」で構成され、「卒業」は「4年間で卒業できるかどうか、不安です」という項目であることから、どちら

体育系大学生の大学生活不安に関する研究

表3 大学生活不安尺度の因子分析

因子	質問項目	I	II	III	IV	V
〈大学不適應〉						
大学への不信感	こんな大学にいたら自分がダメになるのではないかと憂鬱な気分になることがあります。	.761	.076	-.130	-.016	.050
退学	大学を退学したいと思ふことがあります。	.721	.028	-.029	-.013	.009
大学への不安	この大学にいますと、何か不安な気持ちになります。	.691	-.008	.044	-.011	-.051
転学・転部	できることなら、転学あるいは転部したくて仕方ありません。	.585	-.045	.065	.016	-.030
学部不適應	入学した学部が自分にあつていないような気がして不安です。	.495	-.051	.099	.060	.052
〈大学生生活〉						
就職	将来、良い会社に就職できるかどうか、不安です。	.051	.662	-.053	-.100	-.062
卒業論文	卒業論文がうまく書けるかどうか、不安です。	.063	.634	-.085	.006	.002
先生からの呼出	先生に「研究室まで来るように」と呼ばれたら何を言われるかとても気になります。	-.099	.528	-.046	.030	.045
必修科目の単位	必修科目の成績がD(不可)だったらどうしようと心配になることがあります。	-.017	.498	.171	.065	.045
授業単位	申請した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配です。	.008	.453	.233	.091	-.031
〈留年〉						
卒業	4年間で卒業できるかどうか、不安です。	.024	-.057	.860	.027	-.003
留年	留年したらどうしようと、気になります。	-.002	.015	.848	-.054	.020
〈学習〉						
テスト(解答不可)	テストを受けていて、わからない問題に出会ったとき、頭の中が真っ白になってしまうことがあります。	-.021	-.030	-.066	.804	-.018
テスト(時間不足)	テスト中に時間が残り少なくなると、自分の考えがまとまらなくなります。	.009	.074	-.055	.657	.003
テスト(緊張)	テスト中、緊張して自分の力が発揮できません。	.063	-.067	.116	.502	-.089
授業(緊張)	授業で発表するとき、声が震えることがあります。	-.021	.017	-.001	.409	.166
〈人間関係〉						
先輩	部活やサークルで先輩たちとうまくつき合えるか心配です。	.030	-.105	.022	-.034	.807
友達	友達と一緒に何かしなければならぬとき、うまく協力できるか不安な気持ちになります。	.083	.020	.022	.047	.571
公的自己意識	大学で人が自分のことをどう思っているのか、気になります。	-.107	.223	-.035	-.026	.475

も留年に対して不安を感じる因子であるため「留年」と名付けた。因子IV ($\alpha=.69$)は、「テスト(解答不可)」「テスト(時間不足)」「テスト(緊張)」「授業(緊張)」で構成され、学習に対して自信がない時に強まる不安であることから「学習」と名付けた。因子V ($\alpha=.66$)は「先輩」「友達」「公的自己意識」で構成されていることから「人間関係」と名付けた。

表4と表5は、体育系大学生の大学生活不安上位群と下位群で各因子と項目に差があるのかを明らかにす

るため、 t 検定を行ったものである。その結果、5因子とその項目全てにおいて上位群の方が有意に高い値を示した。特に t 値の差が大きかったのは、因子では「大学生生活」($t=19.386, df=529, p<.001$)となり、項目では「大学生生活」因子の「必修科目の単位」($t=15.66, df=547, p<.001$)、「授業単位」($t=13.75, df=547, p<.001$)であった。単位に対する不安は大学特有のものであり、これらの不安に適応できている学生は不安が弱く、適応できていない学生は不安が強いということが推測でき

表4 大学生生活不安上位群・下位群と各因子の比較

因子	上位群 (n=243)		下位群 (n=306)		t 値
	M	SD	M	SD	
大学不適應	1.63	1.66	0.37	0.87	10.70***
大学生生活	4.13	0.98	2.08	1.49	19.39***
留年	1.06	0.92	0.27	0.62	11.49***
学習	2.00	1.23	0.41	0.75	17.76***
人間関係	1.69	1.08	0.53	0.72	14.40***

*** $p < .001$

表5 大学生生活不安上位群・下位群と各項目の比較

項目	上位群 (n=243)		下位群 (n=306)		t 値
	M	SD	M	SD	
〈大学不適應〉					
大学への不信感	0.41	0.49	0.10	0.30	8.61***
退学	0.28	0.45	0.06	0.24	6.81***
大学への不安	0.42	0.49	0.10	0.31	8.59***
転学・転部	0.24	0.43	0.07	0.25	5.73***
学部不適應	0.28	0.45	0.04	0.19	7.93***
〈大学生生活〉					
就職	0.88	0.32	0.61	0.49	7.65***
卒業論文	0.93	0.25	0.57	0.50	11.24***
先生からの呼出	0.71	0.45	0.35	0.48	8.99***
必修科目の単位	0.78	0.42	0.22	0.41	15.66***
授業単位	0.82	0.38	0.32	0.47	13.75***
〈留年〉					
卒業	0.52	0.50	0.13	0.34	10.23***
留年	0.54	0.50	0.13	0.34	10.80***
〈学習〉					
テスト (解答不可)	0.60	0.49	0.13	0.34	12.48***
テスト (時間不足)	0.64	0.48	0.14	0.35	13.41***
テスト (緊張)	0.30	0.46	0.04	0.19	8.44***
授業 (緊張)	0.47	0.50	0.09	0.29	10.36***
〈人間関係〉					
先輩	0.47	0.50	0.08	0.27	10.98***
友達	0.51	0.50	0.09	0.29	11.48***
公的自己意識	0.72	0.45	0.36	0.48	8.93***

*** $p < .001$

る。これら大学生生活特有の不安を学生から取り除くためには、学生相談室利用の促進や様々なプログラムの展開を大学が行っていかねばならない。学生相談は、学生支援の中で最も一般的なものであり、全国の大学における学生相談室の設置率は82.5%と多くの大学が設置している³⁰⁾。一方で、全国の大学における学生相談室への来談率の平均は4.8%³¹⁾と低い値となっており、学生相談室を今以上に訪れやすくする必要がある。また、今回対象とした体育系大学生に「大学に

カウンセラー窓口があることを認知していますか」という質問を行ったところ、約7割の学生が「いいえ」と回答していることから、学生相談室の存在を周知させる必要があると考えられる。さらに、学習面でのプログラムについて、森田(2004)は「キャンパス実践論」³²⁾を提案している。このプログラムは、授業の受け方やノートの取り方といった教育を行い学生の大学適応を促進するものであり、学習面での不安を抱える学生に対しては有効的なサポートである。

3. 大学生活不安の要因

性別、入学形式、学友会、大学生活への満足感などによる大学生活不安への影響を検討するため、大学生活不安尺度の総合得点と大学生活不安尺度から抽出された5因子の各下位尺度得点に対し、*t*検定を用いて比較を行った。

男女で大学生活不安尺度と各因子の比較を行ったところ、大学生活 ($t=2.10, df=542, p<.05$) と学習 ($t=3.62, df=542, p<.001$)、人間関係 ($t=2.76, df=542, p<.01$) において、男子学生よりも女子学生の方が有意に高い値を示した(表6)。この結果から、女子学生は「大学生活」, 「学習」, 「人間関係」に対して男子学生よりも不安を感じていることが明らかになった。そのため、大学側が女子学生に対して気軽に相談できる窓口の開設や学生同士の交流会を開催するというサポートを展開することが効果的であると考え。独立法人日本学生支援機構が「大学における学生相談体制の充実方策について」³³⁾の報告書の中で特徴的な方策を展開していると示している大学には、女子学生支援センター、女子学生のためのパウダールームが設置され、女子学生会、新入女子学生ウェルカムパーティーが開催されるなど³⁴⁾女性へのサポートを強化している大学がある。このように、すでに実践している大学を参考に、今後体育系大学の女子学生に対するサポートの検討を進めていく。

運動部所属群と学友会無所属群で大学生活不安尺度と各因子の比較を行ったところ、有意な得点の差は見られなかった(表7)。全体的に運動部所属群の方が不安は強い傾向にあるが、「大学不適応」下位尺度においては、学友会無所属群の方が高い値を示した。今回の体育系大学生を対象とした研究では、運動部所属群の方が不安は強かったが、有意な差は見られなかった。しかし、大石(2007)が体育系大学生を対象として大学生活不安の部活動比較を行った研究では、運動部所属群は他の群よりも日常生活での不安が有意に高いということが明らかにされている²⁵⁾。また、大石(2007)は「学内運動部所属者では、大学の授業やクラスでの生活における不安に加えて、学内運動部での日常生活でうまくやっていると不安が生じる。しかし運動部に所属していなければ、大学生活は授業とクラスの仲間との関係だけに限定され、不安を感じる場面自体が少ない」³⁵⁾と述べていることから、体育系大学では運動部所属群の方が大学で過ごす時間が長い分、不安が増すということが窺える。

一方で、学友会無所属群が唯一高かった「大学不適応」については、体育系大学はスポーツが中心となっている大学であるため、学友会に所属していないと、大学内での居場所感や充実感が十分に得られないのではないかと考える。大石(2007)の研究でも「『大学不適応感』は、学内運動部所属者よりも運動部無所属者のほうが高いことが分かった。学内運動部所属者は、

表6 大学生活不安尺度の性別比較

	女子学生 (n=206)		男子学生 (n=338)		t 値
	M	SD	M	SD	
大学生活不安尺度	10.50	6.11	9.80	6.85	1.19
大学不適応	0.89	1.36	0.95	1.47	0.48
大学生活	3.17	1.55	2.87	1.70	2.10*
留年	0.54	0.83	0.67	0.88	1.81
学習	1.36	1.31	0.96	1.22	3.62***
人間関係	1.21	1.07	0.95	1.06	2.76**

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

表7 大学生活不安尺度の部活動比較

	所属 (n=400)		無所属 (n=61)		t 値
	M	SD	M	SD	
大学生活不安尺度	9.90	6.73	8.64	5.85	1.38
大学不適応	0.92	1.44	1.10	1.49	0.89
大学生活	2.91	1.66	2.67	1.62	1.02
留年	0.62	0.86	0.49	0.85	1.11
学習	1.09	1.28	0.93	1.20	0.88
人間関係	1.04	1.08	0.82	0.87	1.79

表 8 大学生生活不安尺度のスポーツ推薦比較

	スポーツ推薦以外 (n=267)		スポーツ推薦 (n=203)		t 値
	M	SD	M	SD	
大学生生活不安尺度	10.50	6.78	9.27	6.65	1.84
大学不適応	0.98	1.50	0.86	1.38	0.86
大学生生活	2.99	1.67	2.82	1.65	0.99
留年	0.56	0.83	0.69	0.89	1.46
学習	1.24	1.33	0.93	1.20	2.45*
人間関係	1.16	1.10	0.91	1.05	2.30*

* $p < .05$

表 9 大学生生活不安尺度の大学生生活（満足感）比較

	不満足 (n=136)		満足 (n=411)		t 値
	M	SD	M	SD	
大学生生活不安尺度	13.54	6.79	8.88	6.05	7.55***
大学不適応	2.34	1.71	0.46	0.94	12.20***
大学生生活	3.29	1.37	2.88	1.71	2.84**
留年	0.88	0.92	0.53	0.82	3.88***
学習	1.43	1.33	1.00	1.23	3.27***
人間関係	1.39	1.17	0.93	1.01	4.12***

** $p < .01$ *** $p < .001$

日常生活で様々な不安を感じながらも、体育大学において大きな役割を担っている学内運動部で頑張ることに、やりがいを感じている³⁵⁾と示していることから、校友会無所属群の学生が体育系大学において、やりがいを感じられるような新たな居場所を大学側が提示していく必要がある。

運動部所属群のスポーツ推薦入学とスポーツ推薦以外で大学生生活不安尺度と各因子の比較を行ったところ、学習 ($t=2.45, df=397, p<.05$)、人間関係 ($t=2.31, df=398, p<.05$) において、スポーツ推薦よりもスポーツ推薦以外の方が有意に高い得点を示した(表8)。スポーツ推薦で入学した学生は高校時代にある一定以上の競技成績を残した学生であり、スポーツ推薦以外の学生よりも大学入学時の時点で明らかに競技能力が高い。それにより、部内での立場にも影響を及ぼす可能性があり、「人間関係」にも有意な差が見られたと推察する。「学習」に関して上野(2014)は、スポーツ推薦入学者を除くと「運動部活動経験は受験勉強など大学進学に関わる進路の選択・決定への取り組みに対して、消極的に働く³⁶⁾と述べている。また、甲斐(1994)は運動部活動への参加について「多くの生徒がスポーツを行いたいと考えてはいるが、実施できないでいることが指摘され、その主要な理由の一つに『学業と両立しない』ことがあげられている³⁷⁾と示している。これらの先行研究からスポーツ推薦以外の学生は、スポーツを推

薦入学などの学歴の獲得に繋げることができなかったため、今後も競技能力だけで自分の将来を切り開くことが難しいと認知している。そのため、運動部と学業の両立に不安を感じていることが窺える。今後、スポーツ推薦以外で入学し運動部へ所属している学生が大学不適応へ陥らないよう早めのサポートが必要である。

大学生生活への満足感で大学生生活不安尺度と各因子の比較を行ったところ、大学生生活不安尺度 ($t=7.55, df=545, p<.001$)、大学不適応 ($t=12.20, df=163, p<.001$)、大学生生活 ($t=2.84, df=284, p<.01$)、留年 ($t=3.88, df=210, p<.001$)、学習 ($t=3.27, df=217, p<.001$)、人間関係 ($t=4.12, df=205, p<.001$) の全てにおいて、大学生生活に満足している学生よりも満足していない学生の方が有意に高い値を示した(表9)。この結果から、大学生生活の満足感が大学生生活不安に影響を与え、大学生生活に満足すると不安は弱まることが明らかになった。今後、学生の大学生生活への満足度を上げるためのサポートを検討していきたい。

IV. まとめ

本研究の目的は、体育系大学に通う学生の不安感の特徴、属性ごとの不安要因を明らかにし、これからの体育系大学生へのサポートの一助にすることである。体育系大学生 549 名に対して、藤井(1998)が作成した大学生生活不安尺度¹³⁾を用いてアンケート調査を

行った結果、「就職」、「卒業論文」、「授業単位」などの大学特有の不安が上位を占めた。次に、因子分析を行ったところ「大学不適応」、「大学生活」、「留年」、「学習」、「人間関係」の5因子が抽出された。また、これらの5因子と大学生活不安尺度の総合得点を用いて「性別」、「部活動」、「入学形式」、「大学生活への満足感」で比較したところ、属性や満足感で大学生活不安の度合いや要因が異なることが明らかになった。

1. 不安が強かった属性を、性別で比較すると「男子学生」よりも「女子学生」の方が、「大学生活」、「学習」、「人間関係」の不安要因において有意に高い値を示した。
2. 学友会で比較すると「学友会無所属群」よりも「運動部所属群」の方が不安は強かったが、有意差は見られなかった。しかし、大学生活不安尺度総合得点の平均値でみると体育系大学を対象にしている先行研究と同様の研究結果が得られた。
3. 運動部所属群の中で「スポーツ推薦」と「スポーツ推薦以外」で比較すると、「スポーツ推薦以外」の方が「スポーツ推薦」よりも、「学習」、「人間関係」において有意に高い値を示した。
4. 不安が強くなる群の特徴として、テストや授業を受ける時に不安を感じる「学習」の因子と先輩や友達との関わりに不安を感じる「人間関係」の因子において不安が強まることが明らかになり、今後は、学習面や人間関係に対してサポートを強化していくことが体育系大学生に有効的であると示唆された。
5. 大学生活への満足感を比較すると、「満足感がある学生」の方が「満足感がない学生」よりも大学生活不安尺度と5因子、全ての不安要因において有意に高い値を示した。今後学生が大学生活への満足感から得られる方法を検討することにより不安の減少が見込まれる。
6. 大学生活不安上位群と下位群で比較を行った結果、「大学生活」因子の項目「必修科目の単位」・「授業単位」に差が見られた。つまり、単位に不安を抱えている学生の方が不安は強いということが窺え、今後大学生活不安を取り除くためには、単位に対しサポートを行っていく必要がある。単位の不安に対して有効的だと考えられる現行のサポートは、「オフィス・アワー」や「学生相談」などが考えられるが、今後単位に対してさらに効果があるサポートの検討をしていきたい。

体育系大学生に対するサポートの研究は、競技生活を支えるための研究が多く大学生活に目を向けたものは少ない。今回、女子学生とスポーツ推薦以外で入学した学生の不安が強いことが明らかになったが、今後

は、体育系大学生の中で最もサポートを必要としている学生を抽出し、その学生に対してどのようなサポートが効果的であるのかを研究していきたい。

V. 引用参考文献

- 1) 喜多村和之 (2000) 高等教育と政策評価. 玉川大学出版部: 東京, 91.
- 2) 笠木三郎 (1982) 「厚生補導」の思い出. 厚生補導, 190: 27-31.
- 3) 大山康宏 (2003) 大学教育学. 培風館: 東京, 136.
- 4) 谷田川ルミ (2012) 戦後日本の大学におけるキャリア支援の歴史的展開. 名古屋高等教育研究, 12: 168.
- 5) 独立行政法人日本学生支援機構 (2007) 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」— http://www.jasso.go.jp/gakusei_shien/jyujitsuhsosaku.html 閲覧日: 平成 27 年 5 月 1 日
- 6) 文部科学省 (2008) 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム (学生支援 GP) http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/gakusei.htm 閲覧日: 平成 27 年 5 月 1 日
- 7) 谷田川ルミ (2012) 戦後日本の大学におけるキャリア支援の歴史的展開. 名古屋高等教育研究, 12: 166.
- 8) 福田真也 (2007) 大学教職員のための大学生のこころのケア・ガイドブック 精神科と学生相談からの 15 章. 金剛出版: 東京, 12.
- 9) 読売新聞教育取材班 (2009) 教育ルネサンス大学の實力. 中央公論新社: 東京, 323.
- 10) 川崎孝明・中嶋弘二・川崎健太郎・川口恵子 (2014) 大学における寄り添い型学生支援体制の構築—中途退学防止の観点からの実践的アプローチ—. 尚絅大学研究紀要人文・社会科学編, 46: 76.
- 11) 中島絵美 (2012) 時代や大学の特色に応じた学生相談の取り組みの検討—大学生不適応の予防的アプローチ—. こども教育宝仙大学紀要, 3: 132.
- 12) 藤井義久 (1998) 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 68(6): 447.
- 13) 藤井義久 (1998) 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 68(6): 441-448.
- 14) 藤井義久 (1998) 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 68(6): 445-446.
- 15) 徳田完二 (2005) 学生期ライフサイクルからみた学生の不安—4 年制大学生と短期大学生の違いについて—. 人間福祉学研究, 8: 179-188.
- 16) 野中優実・山田浩平 (2013) 大学生のユーモアと大学生活不安との関連. 愛知教育大学保健環境センター紀要, 12: 45-52.
- 17) 福井義一・青野明子 (2007) 大学生活において環境要因と個人内要因が大学生活不安や抑うつ, 状態不安に与える影響について. 国際研究論叢, 20(3): 50.
- 18) 桑原民子・社浦竜太 (2011) 大学生における居場所感と大学生活不安に関する研究—学生相談室の利用の有無に注目して—. ものづくり大学紀要, 2: 65.
- 19) 文部科学省 (1992) 登校拒否問題への対応について http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nct19920924001/t19920924001.html 閲覧日: 平成 27 年 7 月 2 日

- 20) 石本雄真 (2009) 居場所概念の普及およびその研究と課題. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(1): 93.
- 21) 萩原建次郎 (1997) 若者にとって「居場所」の意味. 日本社会教育学会紀要, 33: 42.
- 22) 西中華子 (2014) 居場所づくりの現状と課題. 神戸大学発達・臨床心理学研究, 13: 7.
- 23) 中西新太郎 (2005) ポジションどり文化の生きづらさを越えて. 生活指導, 47(8): 42.
- 24) 阿部真大 (2011) 居場所の社会学—生きづらさを越えて—. 日本経済新聞出版社, 東京都: 93.
- 25) 大石千歳・浅見美弥子・奥野知加・渡辺博之・若山章信・今丸好一郎・中本哲 (2007) 東京女子体育大学学生のライフスタイルと健康に関する調査報告 その2—精神的健康に関する基礎調査—. 女子体育研究所所報, 1: 23-48.
- 26) 鶴田和美 (1998) 下位時期から見た学生期. 大学教育における新しい学生相談像の形成に関する研究 (平成9年度文部省科学研究成果報告書): 65.
- 27) 田中存・菅原圭一・菅千索 (2008) 就職不安が大学生の生活不安に与える影響について. 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 58: 44.
- 28) 田中存・菅千索 (2007) 大学生生活不安に関する心理学からのアプローチ. 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 57: 21.
- 29) 日本体育大学 (2015) 2014年度学生生活実態調査報告書. 日本体育大学, 東京都: 84.
- 30) 独立法人日本学生支援機構 (2006) 大学等における学生支援の取組状況に関する調査 http://www.jasso.go.jp/gakusei_shien/seikatsushien_jittai_chosa.html 閲覧日: 平成27年7月2日
- 31) 大島啓利・青木健次・駒米勝利・楡木満生・山口正二 (2007) 2006年度学生相談機関に関する調査報告. 学生相談研究, 27(3): 238-273.
- 32) 森田祐司 (2004) 研究会報告 新生対象の講義「キャンパスライフ実践論」の試み. 広島経済大学研究論集, 27(3): 67-72.
- 33) 独立行政法人日本学生支援機構 (2007) 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」— http://www.jasso.go.jp/gakusei_shien/jyujitsu_hosaku.html 閲覧日: 平成27年5月1日
- 34) 広島経済大学 (2014) 広島経済大学—大学案内2015—. 広島経済大学: 広島, 66.
- 35) 大石千歳・浅見美弥子・奥野知加・渡辺博之・若山章信・今丸好一郎・中本哲 (2007) 東京女子体育大学学生のライフスタイルと健康に関する調査報告 その2—精神的健康に関する基礎調査—. 女子体育研究所所報, 1: 28.
- 36) 上野耕平 (2014) ライフスキルの獲得を導く運動部活動経験が高校生の進路成熟に及ぼす影響. スポーツ教育学研究, 34(1): 14.
- 37) 甲斐健人 (1994) 学歴社会における高校運動部への社会的アプローチ: 教育的「戦略」としてのスポーツの可能性に向けて. 体育学研究, 39(4): 256.

<連絡先>

著者名: 清宮孝文
 住 所: 東京都世田谷区深沢 7-1-1
 所 属: スポーツ社会学研究室
 E-mail アドレス: t-kiyomiya@nittai.ac.jp